

はじける若さ、華やかな学園祭

いも類振興情報編集部

願書提出、入学試験の時期を控え、すぐれた学生を受け入れたい、また、よい後輩を迎えたい、との願いをこめて、各大学ではそれぞれに趣向をこらした、盛大な学園祭（大学祭）が催されます。

多くは在学生の実行委員会が中心となり、大学当局が後援し、地域の商店などの協力を得て、また近在の他大学の学生代表も応援するかたちで、その大学の概要、特色、日頃の活動などを、これから受験する生徒たちばかりでなく、出身の先輩、一般の人達にもわかりやすく紹介できるよう、創意工夫がこらされています。

1. あたたかく、明るい会場

名古屋市の中心部、栄から名鉄瀬戸線^{さかえ}で20分、O駅で下車し、北に向かって住宅街の間の坂道をあえぎ上ること5分で、K学院大学のキャンパスに到着します。広い敷地には大企業のビル、あるいはホテルかとみまがうばかりの大学本部、各館が自然林のなか、ほどよい間隔を保って立ち並び、まさに一大団地を形成していますが、戦後から復興期にかけて、戦災を免れた学び舎、木造の旧兵営を改造した教室、などで勉強した世代にとっては、まさに隔世の感があり、このような恵ま

れた環境でのびのびと勉学に励める学生さんたちは、なんと幸せなのか、との思いにかられます。

K祭と名付けられた大学祭は、前夜祭にはじまり、本祭の前日にはスポーツ大会、コンサートが催され、本祭当日にはとくにステージが設けられ、そこでジャズの演奏、各部対抗のゲーム、トークショー、ダンスなどがつぎつぎともたれ、また教室の一部では、日頃の活動の成果を発表する生け花、書道、写真などの展示も行われています。

急な坂を上り、一息ついたところにある大学本部横の受付で案内図をもらいましたが、これらのステージ、展示会場に行くには、さらに狭く数十段もある、急勾配の石段をのぼらなければなりません。両脇に自然林が残っていて、このキャンパスが設けられた頃は豊かな林に囲まれていたであろうことが想像されますが、学生の皆さんは毎日息を弾ませ、幾度かこの石段を上り下りし、ひとりでに足腰が鍛練されることでしょう。

さすがに女子大だけあって、各会場とも明るく華やいだ雰囲気包まれていました。各地で催される一般の生け花展が、どちらかといえば色彩が抑えられ、幽玄の空間を彷彿とさせるのにくらべ、当学院華道部のそれは若

い人の作品らしく、色鮮やかな花材が多く用いられ、それがたいへんバランスよく活かされていて、案内説明役諸嬢の美しく、しとやかな振る舞いと相俟って、会場全体が、それこそ花園のように明るく、華道に精通した人でなくとも、楽しく親しんで観賞できます。

中国の事情に明るい当学院教員の方が、各地で収集された少数民族の人形の展示もありました。50を越す民族が中国で暮らしていることも驚きであり、新発見でしたが、それぞれの特異な民族衣裳の、目もさめるような色どりに深い感銘を受け、このような展示は他ではめったに見ることができず、収集にどれほど足を運ばれ、ご苦労されたかがしのべれます。

茶会といえば一般には抹茶をいただく会で、春の花見、秋の観楓会その他、折りに触れてたしなむことができ、このたびのK祭でも茶道部による茶会が催され、部員の方々がたてたお茶をいただきながら、心静かなひとときを味わいました。

茶道部とは別に煎茶部があり、こちらでもお茶会がもたれましたが、こちらのほうは、一般には抹茶のようになじみがありません。お客が正座するなか、お茶をだす人はその前で小さな茶碗をお湯ですすいで温ため、急須に茶葉を入れ、これに適温にさましたお湯を注ぎ、客の人数分だけ並べた茶碗に少しずつ注いで蓋をします。客があらかじめ配られたお菓子をいただいたのち、茶碗が配られ、客は蓋をあけてお茶を飲むのですが、その味はたいへん濃く、苦くてかすかに甘みがあり、量は抹茶よりもかなり少なく、口に含み、舌の上で味わう程度です。「煎茶」ときくと、せめて茶碗に半分くらいはいただけたと思っ

ていましたが、これは全くの儀式であって、一つ見聞をひろげた次第です。

2. 笑いを誘う特設ステージ

特設ステージのまわりは、はじめのうちは、後ろのほうにまばらに観客がいる程度でしたが、時間がたつにつれ、また司会者が交替で身振り手振りも面白く見物人に語りかけ、盛り上げようとの努力の甲斐があって、やがて会場いっぱいになりました。大声を出したり、馬鹿げたような表情で人を笑わせたりするのは、やはり女性よりは男の方が適役で、ここでも近在の男子学生らしい司会者が活躍していましたし、見物人のなかにも若い男性が多く見られ、このK学院大学祭が、他学の人達の温かい援助に支えられていることを知りました。

特設ステージわきの広場にはフリーマーケットも設けられ、グラウンド上の敷物に、新品、また使い古されたいろいろの品物が雑然と積まれ、また古着？と覚しきセーター、Tシャツなども下っています。

足を止める人のなかには熟年、中年も見られますが、やはり若い世代に人気があり、いわばお互いの不用品の売買の場所のような感じでした。

3. 賑わう模擬店

お祭りなどで、庶民がもっとも楽しみにするのは、普段なかなか見ることのできない出店で買い物をし、飲食をすることでしょう。学園祭でも広場いっぱい模擬店が並び、開場早々から見物客が大勢集まっていました。

以前から大学ばかりでなく、小中高校、そのほかの団体でも学芸会などの行事にあわせ



模擬店の案内 (K学院大学)

てバザーが開かれ、持ち寄った不要物品などの販売のほか、臨時のレストランが設けられ、とくに小中学校では家庭科担当の先生を中心として、保護者が材料を提供したり、労力奉仕に汗を流したりして大活躍をし、また高校、大学では生徒、学生が主体となって、同様に、多少手の込んだ飲食物を提供し、これらはたいへん好評で、学校関係者、保護者ばかりでなく、一般の人々も毎年のバザーを楽しみにしていました。

最近では、家政学部をもつ大学でも、女子

大でも、手間をかけて調理するような飲食物はつくらず、また食品衛生上の観点からもなかなか難しくなり、この頃では既製の食品を並べたり、その場で焼いたり温めたりする程度の簡単なものを出す店がほとんどで、普通のお祭りの出店とあまり変わらなくなり、ある意味では以前のような楽しみがやや薄れているのも、時代の趨勢でやむを得ないことでしょう。

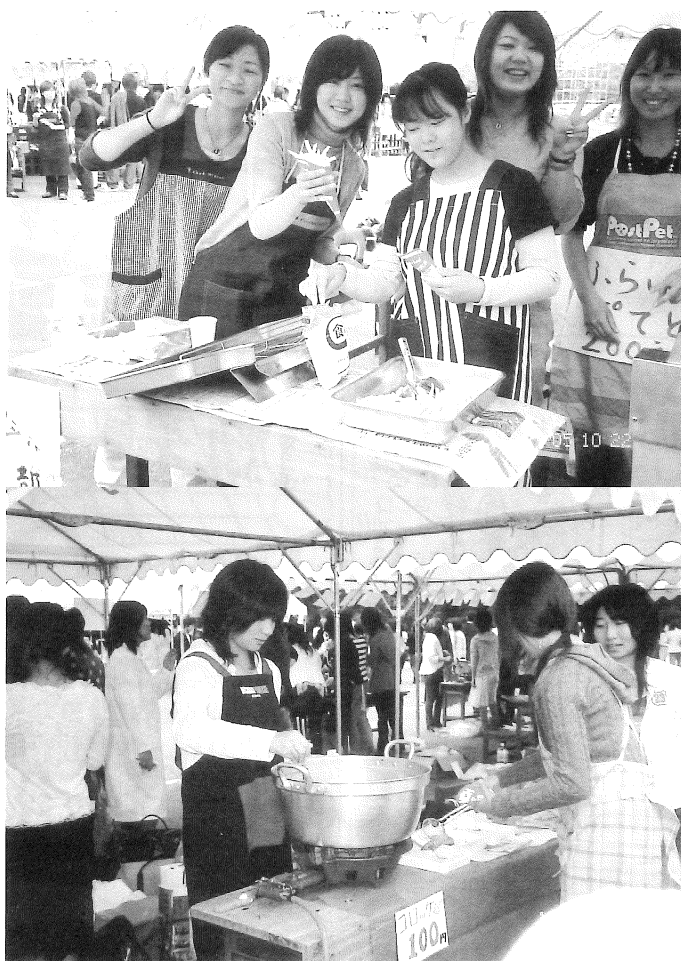
それでも、たくさんの出店がありました。

ジュース、チョコバナナ、ベビーカステラ、たいやき、など、おやつになるもの、肉まんじゅう、五平もち、みたらしだんご、やきそば、やきうどん、など、食事のかわりになるもの、等々、各学部学科、また同好会が活動の資金調達の目的で、思い思いの店構えに工夫をこらしています。

4. 絶品、フライドポテト

フライドポテトの店が二つありました。入口に近い一つは、なんと「馬術部」、他は「英語英米文化学科」の出店です。

原料のジャガイモはメーカーインで、これを割り箸くらいの細さに、きれいに縦に刻み、特製の深い鍋で揚げていました。大きめのメーカーインを縦切りにしたので、揚げたポテトは長く、容器のカップに入っても十分に頭を出していま



上、フライドポテト 下、コロッケの出店（K学院大学）

す。褐色のこげ目など全くなく、きれいな淡黄色で、それでいて固く、カリッと揚っています。ジャガイモのフライは、一度油を通したあと、さらに油を熱してから再度揚げるとカリリと揚がるといわれ、家庭でもこのようにしてフレンチフライをつくりますが、油の温度管理が適切でないのか、あるいは原料に問題があるのか、たいていは淡い褐色となってしまう。また、街のレストランで肉料理に添えて出されるフライドポテトは、多くは波状にカットされ、着色しないのできれいに揚がっていますが、フワフワと柔らかくなっていますし、スタンドなどで売っているフライドポテトもだいたい太めですが、やはりベタつくような柔らかさであり、これらにくらべるとK祭のフライドポテトは、素人の集まりとはいいいながら、なんときめ細かく上手に、おいしく調理されているのか、と感心し、たいへん美味しかったこと、上手に調理されていることの礼を述べて、学生諸嬢の労をねぎらいました。

コロッケの店も一つありました。食物、栄養についての専門家の卵の集まりである「食環境栄養学科」クラスの出店で、本来であれば大いに腕をふるって、美味しいコロッケを自からつくって提供したいところなのでしょうが、大勢の顧客にそのような対応はとても無理で、市販の冷凍品を大量に仕入れ、それを揚げて販売していました。どのような祭、イベントでもコロッケは最大の人気食品で、ここでも店の前には長蛇の列ができ、揚げる人、それを小袋に入れて渡す人、ともに手を休めることなく、昼すぎにはもう売り切れて閉店せざるを得なくなりました。

このコロッケは、ジャガイモにニンジン、

トウモロコシが入った野菜だけで、肉入りではありませんが、揚げたてのアツアツを口に含むと、油の香りとほんのりとした野菜の甘みを感じ、空腹であったせいもありましたが、ほんとうに美味しいと思いました。国民食といってよいほど、日本人の味覚をとらえているコロッケは、このようなイベントの会場ばかりでなく、全国どこへ行っても、それを自慢する店に出会い、賞味できるのはほんとうに嬉しく、有難いことです。

5. 感動を呼ぶ作品展

名古屋市営地下鉄H駅で下車し、南に向かい商店街の間の坂を上り、5分ほどのところにS女学園大学があります。明治38年（1905）に裁縫学校として設立されたのが前身で、今年（平成17年、2005）創立100周年を迎えました。

当学園は幼稚園から高校までが併設されていますが、このキャンパスにあるのは大学だけで、高校以下は別の地下鉄K駅近くにあり、幼稚園と小学校は男女共学、中学以上は女子だけとなります。

前述のK学院大学が郊外にあるのと対照的に、S女学園大学はやや都心といった感がありますが、すぐ近くに動植物園があって緑に恵まれ、学ぶにはよい環境といえましょう。

S大祭と称する学園祭の内容も、ほぼK学院大学のそれと大差ありませんが、併設されている幼稚園などの子供達の作品が展示されていました。図画、書道、工作が主で、まだ4歳、5歳というのに家族、乗り物、花などが生き生きと描かれ、習字では力いっぱい太く勢い良く書かれ、工作は厚紙で自動車、ロケット、家などが本物の模型のように作られ、

先生が優しく適確に指導されていることを知るとともに、幼児教育の大切さを感じました。

当学園でもステージが設けられて催しが行われ、また抹茶の席、生け花、写真の展示などもありましたが、教室の一角に展示された「おおきな木」(シェル・シルヴァスタイン作・絵)の物語には深く考えさせられました。この物語は、あるいはご存知の方もおられるかと思いますが、あらすじは次のとおりです。

一本のリンゴの木が、ある子供が食べたいといっってはその果実を与え、家を造りたいといっっては材料として枝を与え、やがて子供が成人し、外国に行きたいから船がほしいと言われればその幹を与え、切り株だけになってしまします。そしておちぶれて戻ってきた昔の子供が、なおもリンゴの木に求めますが、リンゴの木は、もはや上げられるものはないが、切り株に腰を下ろしてお休みなさい、



模擬店の案内 (S女学園大学)

今の私にはそれしかしてあげられないから、というのです。

子供はただ自分の欲望を満たしたいだけで、全く感謝の念がないのですが、一方リングの木は、自分が犠牲となっている悲壮感をもたず、いつも与えることに喜びを感じ、切り株となってもその思いは変わりませんでした。この物語を読んでどのように考えるか、について会場では来訪者にアンケートを求めています。

6. 人気の「小野芋子」

正門をくぐったところに受付があり、つづくヤードに模擬店がならんでいます。模擬店は、ここ以外の学部棟の内外にも設けられていますが、どうしても通らなければならぬ通路の両側に店があり、やわらかいながら高いトーンの声で勧誘されると、思わず足を止めてのぞきこんでしまいます。

北風が頬にヒンヤリと感じるような季節でしたので、火をとおした温かいものを提供する出店が多く見られます。ここでは、イベントの定番というべきコロッケ、フライドポテトの店はありませんでしたが、おでん、豚汁、うどん、たこ焼き、お好み焼き、などの店が並ぶ一隅に「小野芋子」のネーミングの、芋汁、芋ご飯を出す店がありました。

まだ昼には少々間がありましたが、各出店



上、下、「小野芋子」の出店（S女学園大学）

の前にはたくさんの人だかりができ、椅子がないので湯気のたつ井あるいはお皿をかかえ、立ったまま味わっていました。「小野芋子」はSサバイバルというグループが運営していますが、このグループを指導する先生の実家が岐阜県にあり、そこでさつまいもを栽培しているので、そのイモを用いて芋汁、芋ご飯をつくっているのです。さつまいもは無農薬栽培で、収穫時には近くの小学生にイモ掘りの体験実習をしてもらい、そのときに収穫されたものが、このたびのイベントに使わ

れています。

芋ご飯は、さつまいもの皮をむき、小さなサイの目に切り、塩味をつけて炊き込み、黒ゴマを振りかけたものですが、うす甘いさつまいもが、軟らかめに炊かれたご飯とよく調和していました。芋汁の方は、さつまいもの皮を剥かずに薄く切り、コンニャク、ニンジン、ゴボウといっしょに煮、みそ味とした汁で、さつまいもが溶けないように、あまり火を強くしないで煮てあるため、野菜類はやや固い感じですが、美味しく炊けています。「小野芋子」の店は人だかりが絶えず、繁昌していて、売り子ばかりでなく、材料を洗うもの、切るもの、空になったお釜、鍋にすばやく仕込んで新しく炊くもの、などSサバイバル諸嬢は大忙しでしたが、店の前に飾られた愛らしいマスコットといっしょに写真を撮りたい、という客もいて、撮影係としての労をとることも忘れません。芋ご飯と芋汁のセットで300円は手頃な値段でしょうが、若い人の胃袋を満たすには十分な量とはいえないかもしれません。

(「小野妹子」は生没年不詳。606年聖徳太子が隋と国交を開くにあたって第一回の遣隋使となり、有名な「日出処天子……」の国書を^{ようだい}煬帝に捧げ、翌年隋使とともに帰国しました。)

7. 地域との交流の場

学園祭(大学祭)では、学生の皆さんが甲斐々々しく動きまわり、明るい笑顔で来客と対応している姿がたいへん印象的であり、私達も活発な若い人達と接することにより、何かしら力をあたえられた思いでした。

一般社会の人達との交流は、普段はあまり

ないかもしれませんが、学生さんはこのような機会に、教室では学ぶことのない実体験をされ、それは将来社会に出て働くとき、あるいはよき家庭人となるとき、かならず立派に活かされるであろうと思います。

このたびは、一部の大学の学園祭を訪れただけでしたが、各地の短大、高校でも、規模こそ異なれ、似たような催しがもたれることでしょう。そして生徒さんたちは、大学生とはまたちがった、純粋な若さを発揮して、地域の人達と交わってお互いの理解を深め、愛される存在となり、自らの可能性を見出し、将来に向かつての希望を開くにちがいありません。

編集後記 朝早く出勤する人でしょうか、コッコツと足音が響きます。冬至を過ぎ、夕暮れがおそくなったのに、夜明けはなかなか早まりません。窓を開けると満天に星が輝き、キーンと室内に流れこむ寒気は霜の朝を予感させます。東の空が少しづつ白みはじめ、樹々のシルエットを美しく映し出していますが、暁の明星はなおひとときわ明るく、輝きを失いません。静かな世界に動きを添える鳥たちも、間もなく眠りからさめることでしょう。

いも類振興情報 第86号

平成18年1月15日発行

発行所 財団法人 いも類振興会
〒107-0052 東京都港区赤坂6-10-41
ヴィップ赤坂303号室
電話 03-3588-1040
FAX 03-3588-1225
振替 00130-1-110152
印刷所 JTB印刷株式会社